市場誘導型から制度誘導型にシフトするアジアの経済統合

早稲田大学　浦田秀次郎

東アジアでは活発な貿易と直接投資を媒介として経済統合が急速に形成されている。東アジアでは 21 世紀に入るまで、自由貿易協定のような地域貿易制度は、ASEAN 諸国を加盟国とする AFTA が 1992 年に創設されたくらいで、ほとんど存在していなかった。21 世紀に入るまでの東アジアでの経済統合は、貿易と投資制度の自由化により市場メカニズムが円滑に機能するようになったことで実現されたことから、市場誘導型の経済統合と呼ぶことができる。このような東アジアにおける市場誘導型の経済統合は、関税同盟や自由貿易協定が導入された欧州および北米における制度誘導型の経済統合とは性格が異なっていた。しかし、アジア通貨危機を契機として東アジアにおいても金融協力であるチェンマイ・イニシアティブや自由貿易協定が締結されるようになり、制度誘導型経済統合の性格が現れるようになってきた。本論では、以上のような東アジアにおける経済統合の動きと共に、それらの経済への影響を分析し、東アジアにおけるさらなる経済統合へ向けての障害を抽出し、それらの障害を乗り越える方策を考えてみたい。